

| | |
|------------------|---|
| Title | 安酸敏眞氏による「ニーバーのルネサンス理解の思想史的考察」報告(科学研究費補助金「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」第4回研究会) |
| Author(s) | 鈴木, 幸 |
| Citation | 聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 54-54 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4967 |
| Rights | |



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

科学研究費補助金「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」第4回研究会

安酸敏眞氏による「ニーバーのルネサンス理解の思想史的考察」報告



左上：高橋義文教授，右下：安酸敏眞教授

2014年2月28日（金）聖学院本部新館2階会議室において、2013年度第4回目「ラインホルド・ニーバー」研究会が開催された。この研究会は日本学術振興会科学研究費補助金の基盤研究(B)「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」（課題番号：23320025、研究代表：高橋義文）の助成で開催され、総合研究所のラインホルド・ニーバー研究会との共催で行われた。北海学園大学教授の安酸敏眞氏より、標記の題にて研究報告をしていただいた。参加者は22名であった。

ニーバーのルネサンス理解は、ルネサンスをキリスト教神学から見ている点に面白みがあると安酸氏は言う。そこで、ニーバーの歴史神学を最も表していると考えられる『人間の本性と運命』の第2巻『人間の運命』の、第5章と第6章のルネサンス論を中心に考察を進めることから本報告は始められた。中でも安酸氏が注目したのは、ニーバーが注で取り上げているK・プールダッハやE・ベンツの研究であった。

プールダッハによると、ルネサンス概念の歴史

的意義を探るためには、マキャヴェリ『フィレンツェ史』におけるリエントの革命に目を向けることが重要であるという。リエントは護民官の称号のもとに、ローマを古代共和制に戻そうと尽力した人物である。プールダッハは、「これこそ再生という国際概念の勃興」とであると言及している。また、言語学者であるプールダッハによれば、「再生」も「改革」(reformatio)も同じ意味を持つこと、すなわち「ルネサンス」と「宗教改革」は重なりあうことが指摘されている。

また、「世界と人間の発見」の時代としてルネサンスを捉えたブルクハルトの見解や、プールダッハのテーゼにおける問題の所在について言及しているE・トレルチの考察、また、E・ベンツによるリエント論についても安酸氏により言及され、ニーバーが注においてさりげなく触れている事柄も、西洋思想史を理解する大きな手掛かりとなることが報告された。

報告後の質疑応答では、プールダッハやベンツの影響を受けた考察はニーバー独自のことであり、トレルチの理解とは異なること、ニーバーのルネサンス理解が広いこと、ルネサンスと宗教改革が一体のものであるというプールダッハの言語的研究を肯定した上で、ニーバーが両者の対立と、ルネサンスの勝利を述べていること、2つのRと2つのHからみた歴史の有意義性について等、活発な議論が交わされた。3年計画の科研費共同研究の締めくくりとして相応しい研究会であった。

1 Renaissance (ルネサンス)とReformation (宗教改革)、Hellenism (ヘレニズム)とHebraism (ヘブライズム)のこと。

(文責：鈴木 幸[すずき・みゆき] 聖学院大学基礎総合教育部ポストドクター)